

げたに ばける

むらが ありました。むらの そとを おがわが ながれて いました。かわの きしには はんのきが しげって いました。

はんのきの したで おかあさんの たぬきが こどもの たぬきに ばける ことを おしえて いました。

「おてらの こぞうさんに ばける ときは ころもを つけて でのだよ。おきむらいに ばける ときは まげを つけて、 ひげを はやして、かたなを おこしに さしてね。」

「それでは、おてらの こぞうさんに ばけて みよっと」

こどもの たぬきは こぞうさんに ばけて みました。けれども、たいへんな ことに、こぞうさんが ぴんと ひげを はやして いました。

「だめだよ。おひげなんぞ つけたり して。それは おきむらいに ばける ときだよ」

おかあさんの たぬきは がっかりして いました。

そんな ぐあいだ こどもの たぬきは なかなか うまく ばける ことは できませんでした。それでも、どうした ことか、げたに ばける ことだけは たいへん うまい もので ありました。

そこで こどもの たぬきは げたに ばけました。そして はんのきの したに ころがつて いました。

すると むこうから ひとりの さむらいが やって きました。さむらいは げたの おを きって こまっつて いる ところでしたので、

「や これは うまいわい、ここに げたが おちて いる」と いった、こどもだぬきの ばけた げたを はきました。

きの かげから この ようすを うかがって いた おかあさんだぬきは たいへんな ことになったと、めを まんまるくして おどろきました。

さむらいは すたこら あるいて いきました。

こどもだぬきは、いまにも つぶれそうで、おもわず、

「ぐっ ぐっ」

と こえを だしました。さむらいは びっくりして あしもとを みると、げたの うしろに ふでの ほのような しっほが ちよろりと でて いきました。

けれど さむらいは かまわず どんどん あるいて いきました。

「ぐっぐっぐっ、かあちゃん」

こどもだぬきは たまらず とうとう おおきな こえを だして なきだしました。

おかあさんだぬきは しんぱいして、きの かげを かくれて さむらいの あとを ついて いくのです。

その うちに さむらいは むらにはいって いきました。

むらには げたやが ありました。

さむらいは げたを かって、こどもだぬきの ばけた げたを おもてに だして やり、おあしを ひとつ やって、

「や、ごくろうだったのう」と いいました。

こどもだぬきは おあしを もらったので さっきの くるしさも わすれて、よろこび いさんで かえって いきました。

底本\*「新美南吉童話集 1 ごん狐」

著者\*新美南吉

出版社\*大日本図書

出版年\*1982年1月31日初版第1刷発行

入力に使用\*1999年3月25日第11刷発行

入力\*安城市中央図書館職員